

あみだぶつ　　あみな 阿彌陀仏の御名をきき

■ 楽曲データ

歌詞：親鸞聖人御和讃

楽曲：平野一郎 作曲

発表：本願寺仏教音楽・儀礼研究所 2007年

初演：「御正忌報恩講奉讃演奏会」 2007年1月15日 聞法会館

初出：『讃歌集 二部合唱』第10巻 本願寺出版社 2012年

管理番号：M2630

■ 創作の経緯

2006（平成18）年、本願寺仏教音楽・儀礼研究所（現・浄土真宗本願寺派総合研究所仏教音楽・儀礼研究室）の委嘱により作曲され、翌年に発表された。

■ 校訂報告

校訂譜：『聖歌・讃歌集』第1巻収録

底資料：自筆譜

比較資料：—

校訂の詳細：特記事項なし

■ 解説

親鸞聖人750回大遠忌を前に、創作された仏教讃歌です。親鸞聖人のご和讃を、日々の暮らしのなかで口ずさんでいただければと思います。

◆ 作曲者について

作曲は、平野一郎さん（1974～）。京都市立芸術大学、同大学院で学んだ新進気鋭の作曲家です。大学在学中から日本各地の祭礼とその音楽を巡るフィールドワークを行うなど、宗教的な事柄への関心が高く、京都市の空也堂における歡喜踊躍念仏（空也念仏）の復興にも携わりました。仏教讃歌にはこの曲のほか、同じくご和讃による《十方衆生のためにとて》があります。

◆ 歌詞について

親鸞聖人の遺された『浄土和讃』のなかの1首です。すべてを阿弥陀さまにおまかせしてお慈悲をよろこび、お念仏を申す——そうする者を必ず救う、とおっしゃった阿弥陀さまのお徳が讃えられています。

◆ 曲について

温かく穏やかな曲調は、阿弥陀さまの限りないお慈悲を思わせます。どなたにでも歌っていただけるよう、音域も配慮されています。

◆歌い方

- ① 4小節を大きくひとまとまりにとらえ、レガートに（なめらかに）歌いましょう。
- ② 7小節目では、3拍目の音がいちばん高くなっています。何気なく歌うと、この音が自然と大きくなってしまいましたが、3拍目の歌詞「を」は助詞なので、少し軽く歌いましょう。そうすることで、直前の「御名」と、次の「きき」という言葉がより明確になり、歌詞が聞き取りやすくなるでしょう。
- ③ 5・6小節目は、「歡喜」「讚仰」という言葉が分かるように、言葉とメロディーの続き方に注意して歌いましょう。
- ④ 11小節目3・4拍目「ファ→レ→ファ」のように、いちど下がって再び同じ音に戻る音型では、戻った音（ここでは「ファ」）が低くなりやすいので、気をつけましょう。続く8小節目の「ソ」も、ややもすると低くなりがちなので、注意しましょう。音の高さだけでなく、母音「あ」の響きを美しく保つこともポイントです。
- ⑤ 13～16小節目は二部合唱になっています。特に15小節目3拍目～16小節目は、声部間の音程が4度になるので、合わせにくいと感じる方もいらっしゃるかもしれません。お互いのパートをよく聴きながら、練習してみましょう。
- ⑥ 14小節目1拍目「ほ」は、Hの子音をはっきりと。「くどくのおうを」と聞こえないように気をつけましょう。
- ⑦ 14小節目4拍目も、7小節目と同じように、上のパートは助詞「を」で音が上がります。歌い方を工夫しましょう（②参照）。
- ⑧ 17・18小節目「一念」「大利」という言葉の切れ目に注意しましょう。
- ⑨ 19・20小節目も11・12小節目と同じ音型ですが、特にディミヌエンド（だんだん弱く）のときは、音が下がりやすいので気を付けましょう。

解説執筆：山口篤子（本願寺仏教音楽・儀礼研究所 [現・浄土真宗本願寺派総合研究所] 研究助手）

※本解説は、「メロディーの宝石箱」No. 71（仏教婦人会総連盟機関誌『めぐみ』第198号収録）を加筆・修正のうえ、転載。

Copyright: Jodo Shinshu Hongwanji-ha Research Institute. All Rights Reserved.